

コーポラティブハウス（自由設計集合住宅）の収納空間に関する調査研究 —— 収納空間および収納物の実状について ——

関川千尋・三吉順子・石田康子

The Survey Concerning Storage Space of Housing Complexes Designed at Will — The actual circumstances of storage space and stored items —

Chihiro SEKIKAWA, Yoriko MIYOSHI, and Yasuko ISHIDA

Received november, 30, 1988

抄録：我々は 自由設計集合住宅の収納空間の実状と問題点を明らかにするため、近年建てられたコープ住宅の中から 京阪地区 8 地区を対象としアンケート調査を実施した。調査時期は、昭和61年 9 月末から10月下旬であり、調査票回収数218票、回収率84.3%、有効票数209票であった。調査の分析結果は以下のとおり要約される。

- 1) 対象地は、昭和52年～61年に建てられた比較的新しい自由設計集合住宅であり、今回の調査対象となった家庭は、世帯主平均年齢42.3歳、平均年収719.7万円、平均家族人数3.76人、世帯主の半数以上の職業がホワイトカラー層で、共働きが多かった。
- 2) 住宅の平均面積は85.6㎡で、収納空間の平均体積が18.0㎡であった。
- 3) 収納物は、一戸建住宅のそれと比べ、若干の精選や使用頻度の多さ等が見られ、収納空間に対する満足度が、わずかながら高かったものの、自由設計とはいえ、面積に制約のある集合住宅では、満足のゆく収納空間の設計にも限度のあることがわかった。
- 4) また、全体的な問題点として、「はみだし収納」が、一戸建住宅同様見受けられたことや、屋外収納空間の不備あるいは欠除のため、その矛盾が、屋内収納空間にまで持ち込まれていること等が指摘された。

索引語：収納空間、自由設計集合住宅、収納物の精選、屋外収納空間の欠除

Abstract : We took a survey by the questionnaire method on the storage space of the housing complexes designed at will in Keihan District, built between 1977 and 1986, in order to throw light upon their actual circumstances and problems. It was taken in late September to late October 1986. The number of questionnaire received was 218 out of 263, its percentage being 84.3.

Results of the analyzed questionnaires are summarized as follows :

1. The average age of household heads of this survey was 42.3, the average annual income was 7,197,000 yen, the average family size was 3.76. More than half of the household heads were white-collar workers and a number of their wives also had a job.
2. The average floor space was 85.6㎡, and the average capacity for storage was 18.0㎡.
3. Stored items were a little better selected and arranged, and utilized more frequently, compared to those of the detached houses. Eventually people in this survey were slightly more gratified.
4. But, they had some problems, for example, the lack of outdoor storage space etc... And we considered these problems.

Key Words. — storage space
— housing complexes designed at will
— selection and arrangement of stored items
— lack of outdoor storage space

1. 緒言

前報¹⁾でも述べたが、収納空間のあり方の検討は、一定の量的住宅水準を確保したと言われる我が国の住宅事情下では、予備室の確保等の問題と共に今後取りあげられてゆくべき問題の1つである。

著者らは、将来の収納空間のあり方を探るため、前報では、現在比較的豊かな住生活を先取りしていると思われる都市の中流一戸建住宅（持家）を対象に、その収納空間と収納の実状等を検討し報告した。

対象家庭では、屋内外の収納空間を相当面積持っていて、住宅の面積が大きくなれば、収納空間も大きくなる傾向のあることがわかった。またその一面収納物やその使用頻度の検討から、不用品や不急品を多く所持していた。対象家庭では、相当面積の収納空間を備えているにも係わらず、多くの家庭が、「はみ出し収納」を日常的に行っている状態で、各家庭の収納空間に対する不満度は予想外に高かった。

一戸建住宅のフレキシブルな特性が、不用品記念品等を収納空間に貯めこむという住まい方を誘発したものと判断された。当対象の収納に対する満足度をあげ、さらに貴重な空間の有効利用の観点からも、前報では地域ぐるみの不用品等のリサイクルシステムの積極的導入の必要性等を指摘している。

研究の手順として、この小論では集合住宅に視点を当て、その収納空間及び収納物を検討し、その実状を明らかにし、さらに一戸建住宅の場合と比較してみることにした。

我が国の住宅事情から、将来の都市住宅はその大部分を集合住宅に依存せざるを得ない。我が国の集合住宅の供給は、戦後画一的プランによる借家集合住宅が主流であったが、昭和40年代以降、持家集合住宅が供給されている。

また、昭和50年代に入って、持家集合住宅にも、各戸自由設計により供給されるものも現われて来た。自由設計による集合住宅は、多様な国民の住生活を受け止める住空間として、集合住宅の中でも将来を見通した供給方式の1つであるといえよう。

ここでは、この自由設計集合住宅の収納空間や、収納事情に焦点を合わせ、その実状を明らかにするとともに、限られた広さの中で、自由設計により収納の問題がどのように克服されているか検討し、さらに残された問題を指摘することにする。

2. 方法

目的を達成するため、財団法人日本住宅総合センター発行『コープ住宅一覧²⁾』の中から、京阪地区8地区にある自由設計集合住宅棟を選び、そこに居住する家族に対するアンケート調査を行った。コープ住宅（コーポラティブハウス）は、自由設計集合住宅の1形式である。

調査項目の概要は、一戸建の場合に準じ、①住宅の状況、②収納空間の実状、③収納空間に対する意識及び評価、④家族の状況などである。調査票配布、回収は研究者が直接行い、一週間留

め置いた後、回収する方法をとった。

実施概要は表1に示す通り、配布数263票、回収率は84.3%であった。

3. 結果

＜表1＞ アンケート実施概要

調査期間	昭和61年9月30日～10月22日
配布数	263票
回収数	218票
回収率	84.3%
有効数	209票

(1)調査対象の概要

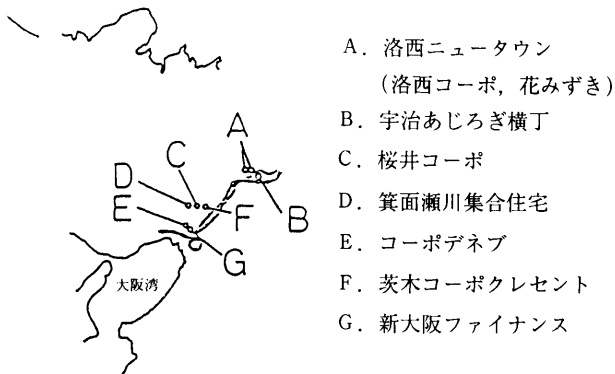
1) 対象地の概要

前記『コープ住宅一覧』によると当コープ住宅は、昭和50年に初めてできて以来、約10年を経た昭和61年現在、全国各地に約170プロジェクト、約4000戸を数えるまでになっている。その中には、1プロジェクト数戸のものから150戸に近いものまでであるが、平均20戸前後のもの

が集まった集合住宅となっている場合が多い。

コープ住宅の計画プロセスは、ユーザーが、直接、土地を見つけ、参加者を募集し、集まった人達自身で、住宅の設計をし、そして工事に進むのが一般的である。また、設計の特徴としては、多様で個性的な間取り・内装が多いこと、メゾネット式の住戸を持つものがあるなどバラエティに富んでいることがあげられる。

今回の調査では、昭和52年～61年の間に京阪地区に建てられたもののうち、調査の便等を考慮して、A. 洛西ニュータウン内（洛西コーポ、花みずき）、B. 宇治あじろぎ横丁、C. 茨木コーポクレセント、D. 桜井コーポ、E. 箕面瀬川集合住宅、F. コーポデネブ（千成町）、G. 新大阪ファイナンスの、8ケースを対象とした。（図1参照）



＜図1＞対象地

これらのうち、A～Fは、住民が最初から住宅建築計画を手がけた、完全な自由設計集合住宅であるのに対し、Gは、業者主導で住宅建築計画がスタートした後に住民が計画に参加してゆくタイプの部分的な自由設計集合住宅である。

集合住宅の規模及び形式では、Aが中規模中層集合住宅であるのに対し、B～Fは、小規模の低層あるいは中層住宅であった。また、

Gは、大規模の高層集合住宅であった。

調査の期間を通じて感じたことであるが、A～Fについては、同じコーポラティブハウス内での居住者相互の交流が濃密な様子であったが、Gについてはむしろ交流がなく、都市型の一般マンションと変わるところがなかった。

2) 対象住宅、対象家庭の概要

まず、対象家庭が以前住んでいた住宅は、平均面積60.8㎡、3分の2が借家住まい、中層住宅

居住者が多かった。

現在の対象家庭の概要については表2に示す通りである。

〈表2〉 対象家庭の概要

住宅の広さ	— 85.6㎡
家族人数	— 3.76人
世帯主年齢	— 42.3歳
世帯主の職業	— 専門的・技術的・事務的職業 56%
年収	— 719.7万円
就労人数	— 1人 45% 2人 42%
主婦の職業	— 有職 36.4%

居住住宅についてであるが、広さは平均85.6㎡で、60～120㎡が全体の約90%を占めている。前住宅に比べると若干広がっているが、前回調査の一戸建住宅の場合、平均面積は123.4㎡であったことから、これに比べると住宅面積はかなり狭いといえる。また、住宅の所有関係では、90%以上が自分の持家であり、マイホームを求めて移転してきた人が多いということがわかる。

現在の住宅の形式では、2階建、3～5階建、15階建の集合住宅3つに分けられた。(表3参照) また前述もした通り、前者2タイプは、最

初からプランに参加できる完全な自由設計、後者1タイプは、途中からプランに参加できる部分的な自由設計といった集合住宅で、比較的新しく建てられた住宅であった。また、メゾネット式の住宅が45戸もあった。

〈表3〉 住宅の形式

2階建集合住宅	3～5階建集合住宅	15階建集合住宅
32件	87件	89件
完全自由設計集合住宅		部分的自由設計集合住宅

次に、家族についてであるが、世帯主の年齢は30歳代が最も多く、次いで40歳代、50歳代で、平均年齢は、42.3歳であった。家族人数は、4人が最も多く、平均3.8人であった。これより、対象の家族は、比較的若い家族

であることが、うかがえる。また、世帯主の職業では、専門的・技術的・事務的職業が半数以上を占めていた。

対象世帯の平均年収は、719.7万円であった。『昭和62年度家計調査年報(全国)³⁾』による平均年収544万円に比べると、大変高く、経済力のある対象であるといえよう。また、妻の36.4%が有職であったが、そのことが平均年収の高さに関係しているものと思われる。

以上のことから、前回調査の一戸建住宅の場合は、世帯主平均年齢51.6歳で、平均年収は、923.3万円、妻の77%は無職で、かなり成熟した住宅地であったが、今回の調査は、ライフサイクルにおいては、比較的初期に位置し、共働きによって相対的に高所得を得ている完全自由設計あるいは、部分的自由設計の集合住宅に住む家族である。

(2)対象地の収納の実態

1) 前住宅の収納空間とその評価

前住宅は、現住宅に比べて住宅面積が小さいことは先に述べたが、それが収納空間にも影響を及ぼしているのか、収納空間の数は平均3.5ヶ所で、平均体積は6.9㎡とかなり小さい値がでた。前住宅の収納空間に対する評価は、予想通り“やや不満”・“不満”が全体の45.4%も占めていた。不満の内容では、「狭い」「少ない」等が不満内容の60%を占め、収納空間の狭さ少なさに対する不満が圧倒的に多かった。

2) 現住宅の収納空間とその使われ方

一戸建住宅の収納空間の検討の場合に、予想される収納空間の分類を前もって行い、その後、実態分析にはいったが、ここでも同様の手法を採用することにする。ただ、集合住宅に於ては屋外収納の機会は、形態から推測して少なく、その分類軸を1本に絞った。以下、これらの分類を参考に、集合住宅での収納の実態について述べてゆくことにする。

＜表4＞ 自由設計集合住宅の
収納空間の分類

屋 内	固 定 型 収 納 空 間	・ 納戸
		・ 屋根裏部屋
		・ 居間の押入れ
		・ 客間の押入れ
内	空 間	・ 家族室の押入れ
		・ 階段下
		・ 廊下周辺の押入れ
		・ 床下収納
		・ 玄関の押入れ
	移 動 型 収 納 空 間	
	は み 出 し 収 納	
屋 外 収 納 空 間		

＜表5＞ 一戸建住宅の
収納空間の分類

屋 外	常設的 物 置	ユニット式物置
		独自につくった物置
	仮設的 物 置	ガレージ
		雨天時物干場の利用
は み 出 し 収 納		
屋 内	固 定 型 収 納 空 間	・ 納戸
		・ 屋根裏部屋
		・ 居間の押入れ
		・ 客間の押入れ
		・ 家族室の押入れ
		・ 階段下
		・ 廊下の押入れ
		・ 独立した押入れ
		・ 床下収納庫
	移 動 型 収 納 空 間	
は み 出 し 収 納		

①屋内収納

i) 固定型収納空間—つくりつけ押入れ—

屋内つくりつけ収納空間は、表6のような形で分布していた。すなわち、納戸、屋根裏部屋、居間の押入れ、客間の押入れ、家族室の押入れ、階段下、廊下周辺の押入れ、床下収納、玄関の押入れである。

＜表6＞屋内収納空間の所有状況

	納戸	屋根裏部屋	居間	客間	家族室	階段下	廊下	床下収納	玄関
大きさの平均(m ²)	13.5 注1)	3.9	4.2	9.1	1.4	1.9 注2)	1.7		
記入件数	69	32	69	88	168	17	110	10	56
%(分母 209)	33.0	15.3	33.0	42.1	80.4	8.1	52.6	4.8	26.8

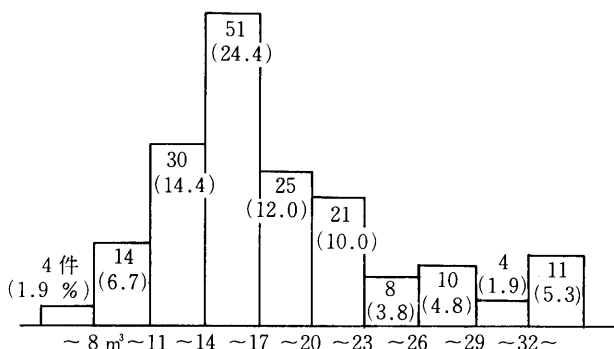
注1) 主としてテラハウス型の住宅に見られた。

形が変則的なため体積は計算できなかった。

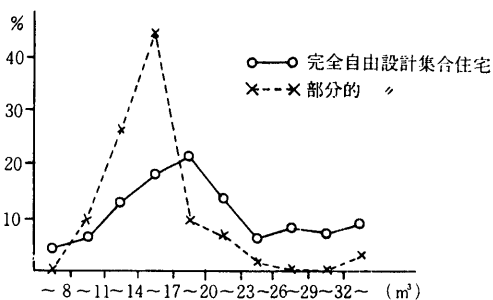
注2) 件数が少ないのと、大きさが小さいこともあり省略した。

屋内収納空間の大きさとしては、納戸が13.5m²と一番大きく、次いで家族室の押入れが、9.1m²となっていた。記入件数では、家族室の押入れが168件で最も多く、次いで廊下周辺の押入れが110件と多くなっていた。また、納

戸が約3割の家庭にあり、一戸建住宅（約4割の家庭で所有）に対して、若干少なかった。



＜図2＞屋内収納空間全体の大きさ

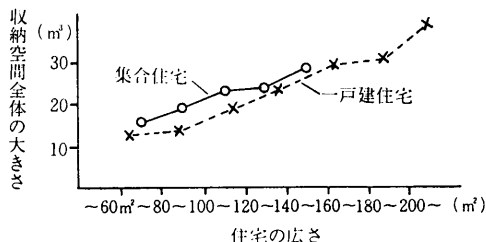


現在の収納空間全体の体積 ($\chi^2=45.3$, 5%水準で有意差あり)

＜図3＞収納空間全体の大きさと住宅の種類

収納空間の大きさが大きくなるのがわかる。

次に、屋内収納空間全体の大きさと年収との関係について調べてみたが、一戸建住宅の場合は、年収が高いほど屋内収納空間の大きさが大きくなっていたが、集合住宅では、ほとんど所得には関係ないという結果が出た。



＜図4＞屋内収納空間全体の大きさと住宅の広さ
(平均値)

各屋内つくりつけ収納空間の収納物についても自由記入方式で調査した。結果を表7に示す。

屋根裏部屋には、冷暖房器具、納戸には家具が多く、比較的大きいものが収納されていた。居間、客間、家族室の押入れには、衣類、寝具が多く、階段下、廊下の押入れには、掃除用具が多

屋内収納空間全体の数は、1軒につき平均5.4個、大きさは図2のようにばらつきが大変大きい、平均体積は、18.0m³となった。一戸建住宅の場合は、収納空間の数平均7.1個、平均体積21.7m³であった。現在住んでいる集合住宅は、前にも述べたように、前住宅に比べれば収納空間の数、大きさは増しているものの、一戸建住宅に比べれば、平均個数、平均体積ともに少なめであり、これは屋外収納を考慮できず、また限られた面積の集合住宅の収納空間所有状況として理解できるものである。

屋内収納空間全体の大きさと住宅の種類との関係については、図3のように、収納空間の大きさが小さいものは、部分的自由設計集合住宅に多く、大きいものは完全自由設計集合住宅に多かった。これは、一戸建住宅の時の注文住宅と分譲住宅との関係とほぼ同じであった。これより、自由設計となると、又は自由設計の範囲が大きくなると、一戸建住宅でも集合住宅でも、収

また、住宅の広さ別に屋内収納空間全体の大きさの平均値を算出しグラフ化すると、図4のようになった。住宅の広さが広がるほど、収納空間の大きさも大きくなるのがわかる。これは、一戸建住宅の時と同じであった。ただ、両者間で住宅面積を同じにした場合、一戸建住宅におけるより、今回の対象の収納空間の大きさの方が大きいことがわかる。

＜表7＞ 屋内収納空間収納物(上位3つ)

屋根裏部屋	件 数
冷暖房器具	1 2
家 具	1 1
衣 類	8

納 戸	件 数
家 具	2 4
衣 親	2 0
寝 具	1 0

廊 下	件 数
掃 除 用 具	2 9
衛生用品・石けん	2 4
大 工 用 具	2 2

玄 関	件 数
はきもの・かさ	4 6
スポーツ・レジャー用品	1 4
衣 類	7

階 段 下	件 数
掃除用具	9
大工道具	5
スポーツ・レジャー用品	5

居 間	件 数
本・アルバム類	3 2
衣 類	2 1
寝 具	1 9

客 間	件 数
寝 具	7 1
座 布 団	4 7
衣 類	2 8

家 族 室	件 数
寝 具	1 4 3
衣 類	1 3 7
座 布 団	6 3

く、玄関や廊下周辺の押入れには、屋外用の収納物が入れている他、全体として様々な場所の収納空間で、各種の物品を収納していることがわかった。この表には上位3位までの収納物しか示していないが、4位以下になると、例えば、屋根裏部屋に自転車が保管されていたり、居間の押入れに「食料品・飲料」や「食器・台所用品」などが置かれていたり、客間に「はきもの・傘」などがあったりして、収納場所との整合性に疑問の残る物が出てきた。このことから、一戸建住宅に比べて、収納物一収納場所の関係が、混乱している事実のあることがわかった。

次に、これらつくりつけ収納空間収納物の使用頻度について調べた。各収納場所に入れている各収納物について、A. よく使う、B. 時々使う、C. 季節や行事により使う、D. ほとんど使わないの4つに分類して集計したのが図5である。一戸建住宅の場合は、図6に示してある。

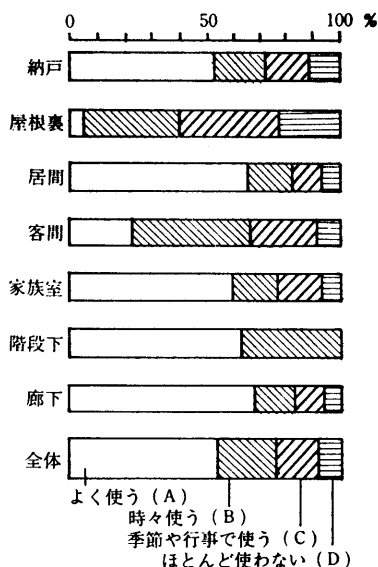
まず、納戸についてみると、よく使うものが全体の52.6%も占めている。一戸建住宅の場合は、納戸の中には、使用頻度CやDの品が多く、季節ごとに入れ替えるものや、ほとんど使用しないものを収納しておく場所として使われる傾向があったが、集合住宅では使用頻度Aが多く、日常着を収納する場所、あるいは着替えの場として使用されている様子であった。

納戸を作った理由については、今回の調査の場合、表8のようになった。物が大型化し、必然的に納戸が必要になってきたというよりは、納戸を作った方が、すっきり住める、ゆとりがもてるといった、美的要因、ゆとり空間志向の住意識が背景にあるようである。

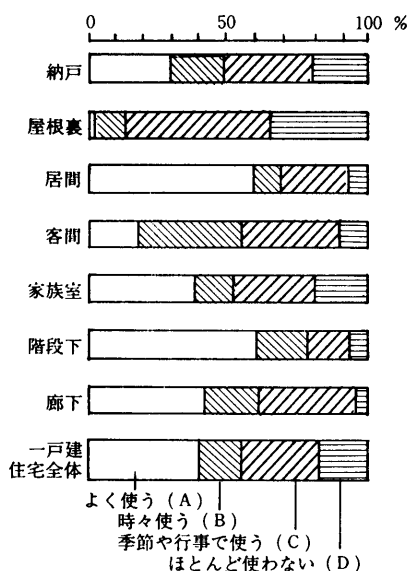
納戸以外の収納場所では、屋根裏部屋には使用頻度の低いものも多く、客間の押入れには時々使うものも多く、他の場所は、いずれもよく使うものが多いという結果が出た。

全体の使用頻度では、一戸建住宅のそれと比べて、わずかながら使用頻度の高い物が多くなっていた。したがって、集合住宅では、一戸建住宅に比べ、所有物が精選されていると判断してよいであろう。

以上、集合住宅の屋内つくりつけ収納空間では、各種の収納空間が作られていた。しかし、平均個数5.4個、平均体積18.0m³で、一戸建住宅に比べ少なめであった。これは、限られた面積の



＜図5＞ 収納場所別収納物の使用頻度
(自由設計集合住宅)



＜図6＞ 収納場所別収納物の使用頻度
(一戸建住宅)

＜表8＞ 納戸を作った理由

納戸に収納した方がすっきり住める	58件
住生活にゆとりをもたせるため	25
所有物が増えてきたため	11
生活用品が大型化してきたため	4
その他	7
・嫁入りだんすを入れるため	1件
・集中管理ができるため	1
・現在、夫の仕事部屋として使用中	1
・現在、子供の勉強部屋として使用中	1
・たまたま洋間が一部屋空いていたから	1など

中の収納空間の大きさとして理解できるものである。

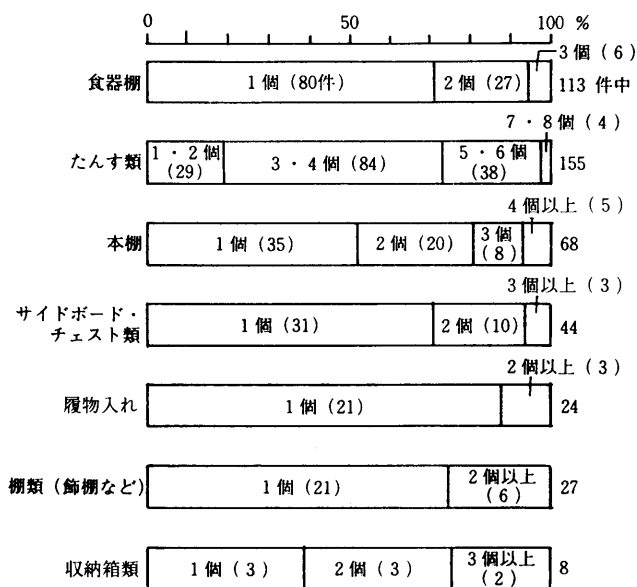
また、収納物は、一戸建の場合に比べ、多少、精選されていたが、収納物と収納場所との間に不自然な対応のある場合があった。これは、集合住宅には屋外収納空間が無い、あるいは不備なことに由来する現象であると考えられた。

ii) 移動型収納空間－屋内収納家具－

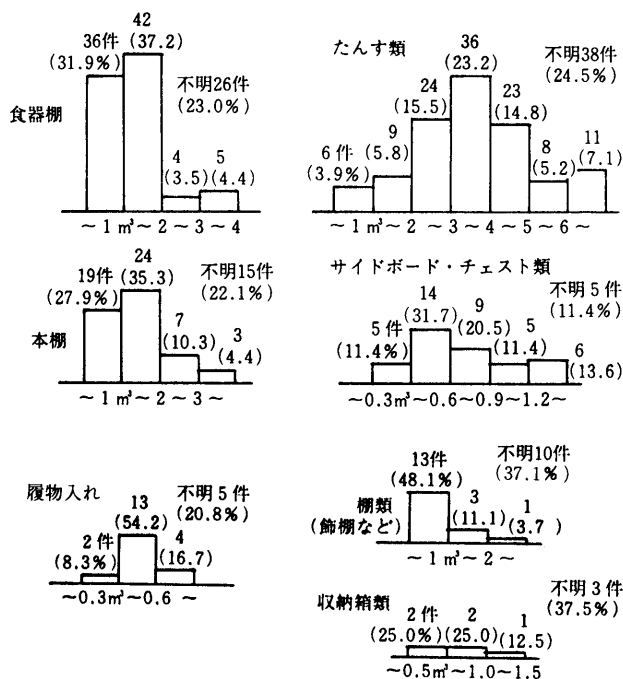
対象地の屋内収納家具使用状況について、自由記入方式で、収納家具

名、数、大きさ、収納物品のうちの不用品の割合を調査した。収納家具としては、たんす、食器棚、本棚、サイドボード・チェスト類、履物入れ、棚類（飾棚など）について集計した。家具の大きさや、不用品割合等は、煩雑な調査のため、“不明”も多かったが、有効回答のみを分析するだけでも内容把握の一助となると考えた。

たんすの個数は、1軒につき平均3.7個あり、大きさは平均3.6㎡、収納物不用品割合は、0～10%（よく使っている）が、全体の約38%を占めていた。中でも、洋服だんす、整理だんすなどは不用品割合が低く、和だんすの不用品割合が高かった。これは、一戸建住宅の場合と同じで、和服が以前に比べ、使用されることが少なくなったものの、耐久年が長く、いざという時のためや、記念品的な意味あいでも所有していることが予想され、なかなか処分できないためと考えられ



＜図7＞屋内収納家具の個数



＜図8＞屋内収納家具の大きさ

り、体積では平均8.0㎡であった。一戸建住宅の場合と比べると、少し小さめであったが、サイドボード・チェスト類といった新しいタイプの収納家具が増えてきていることがわかった。また、

る。

食器棚の個数は、1軒につき平均1.3個あり、大きさは平均1.2㎡、収納物不用品割合は、0～10%が全体の約36%を占めていた。

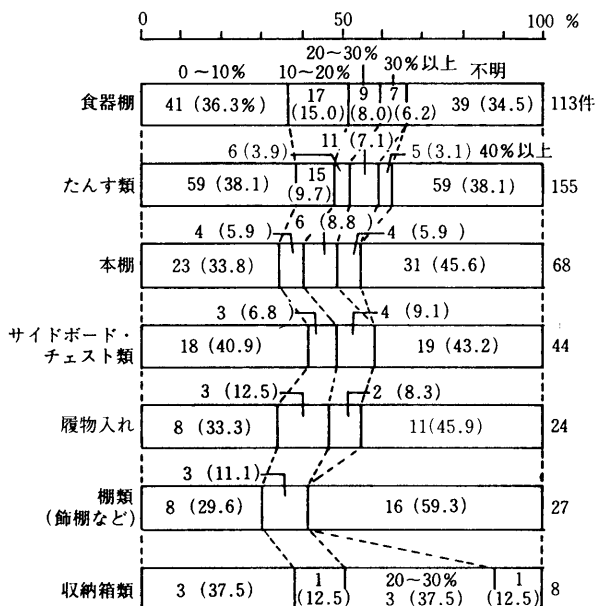
本棚の個数は、1軒につき平均1.8個あり、大きさは平均1.4㎡、収納物不用品割合は、0～10%が全体の33.8%を占めていた。

サイドボード・チェスト類は、1軒につき平均1.4個あり、大きさは平均0.7㎡であったが、0.3㎡未満から1.2㎡以上までばらつきが大きかった。これらは、比較的安価で手に入りやすく、収納するものも、これといって決まっていないため、食器、ビデオテープ、衣類といったように、各家庭で自由に使うことができる。また、置き場所も、いろいろな大きさのものがあるため、無駄な空間（部屋の隅など）をなくす点でも大いに効果がある。なお、調査の結果では居間の隅に置いている家庭が多かった。収納物不用品割合は、0～10%が全体の40.9%を占めていた。他の収納家具に比べて、不用品が少ないことがわかった。

履物入れの個数は、1軒につき平均1.1個あり、大きさは平均0.5㎡。不用品の割合は0～10%が、全体の33.3%を占めていた。

棚類（飾棚など）は、1軒につき平均1.3個あり、大きさは平均0.8㎡、不用品の割合は0～10%が、全体の29.6%を占めていた。

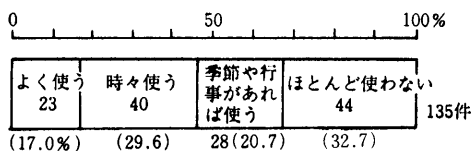
以上の分析から、各家庭の収納家具全体の個数は平均7.1個とな



＜図9＞屋内収納家具 不用品割合

衣類や子どもの玩具などが置かれていた。

次に、はみ出しているものを単純集計し、その使用頻度をみると、“ほとんど使わない”“時々使う”で全体の8割強を占めていた。贈答品など、ものを急に所有することになったものの、入れる場所もなく、仕方なくはみ出したままになっているのが現状であろうと予想される。(図10参照)



＜図10＞はみ出しているもの全体の使用頻度

＜表9＞ 屋外収納場所(件)

	完全自由設計 集合住宅	部分的自由設計 集合住宅	合 計
メーター室	0	29	29
トランクルーム	24	0	24
ベランダの上	13	5	18
サービヤード・玄関わき	3	0	3
その他	6	0	6

に対する不満の内容で、「屋外収納場所がない」を二番目に示していた。

あまり使用しないものは比較的少なく、日常用いるものが多かったのは、一戸建住宅の場合と同じであった。

iii) はみ出し収納—はみ出しているもの—

屋内で、押入れなどの収納空間にも、収納家具にも入りきらずにはみ出しているもののある家庭は、対象者全体の34.9%にのぼっていた。一戸建住宅の時の46.2%に比べると、少し低い値といえる。置き場所としては、たんすの上が一番多く、部屋の隅、ベッドの下などとなっていた。

たんすの上には、衣類、食器・台所用品、本・アルバム類などが、入れものに入れて、又はそのままの状態で置かれていた。

部屋の隅、ベッドの下などには、

②屋外収納

前にも述べたように、集合住宅では、一戸建住宅の時の物置といったような屋外収納場所はないが、それにかわる場所として、表9のように、完全自由設計集合住宅では、トランクルーム(24件)、部分的自由設計集合住宅では、メーター室(29件)やベランダの上(18件)などを使っていることがわかった。

ここで、問題となるのは部分的自由設計集合住宅で使われているメーター室やベランダ・テラスの上である。それらは、もともと屋外収納場所用として作られたのではない。メーター室やベランダの上にもものを置いたりすることには、さまざまな問題が予想され、危険でさえある。

後で詳しく述べるが、当対象では、収納全般

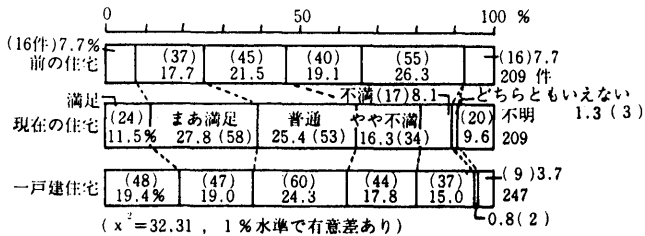
これらの収納実態や要求から推論すると、集合住宅でも、屋外収納場所は不可欠なものであり、早急に何らかの方法で適切な屋外収納場所を確保する必要があるといえよう。

(3)対象家庭の収納空間への意識と評価

(2)では、対象家庭における収納の実態について報告したが、ここではそれらの収納空間を使用者がどのように評価しているのか、また、収納空間についてどのような考えをもっているのかについて述べる。

1) 満足度

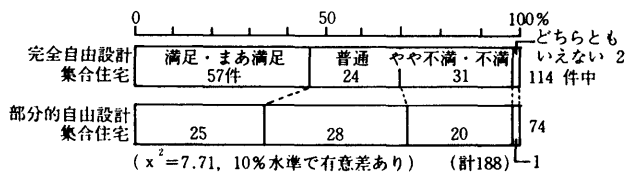
最初に、収納空間に対する満足度について選択方式で記入してもらった。(図11参照)



<図11> 収納空間に対する満足度

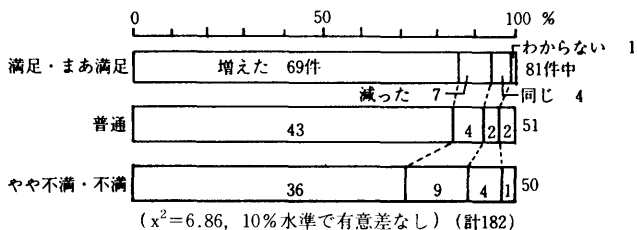
合住宅の方が満足度が高いことがわかる。

以上のことより、対象住宅の収納空間は比較的良好であるといえる。その要因を考えてみると、まず住宅入居年が新しい事が考えられる。昭和60, 61年に建てられた住宅が、全体の44.5%も占めており、自由設計で十分配慮のゆき届いた新しい家に住み始めた段階では、問題がないのは当然である。次に、対象家庭がまだライフサイクルの初期に位置するため、あるいは引っ越した直後であるため、相対的に不満が少ないということも考えられる。



<図12> 住宅形式別満足度

全体の37.8%を占めている。これより、完全自由設計集合住宅の方が、住宅の収納空間に比較的良好な評価をしていることがわかる。



<図13> 前の住宅の収納空間との比較と現在の住宅の満足度

一応収納空間は増えたものの限られた広さの中で満足するほど増やすことができなかったケース

前住んでいた住宅に比べると、“満足”“まあ満足”が増え、住み替えにより、満足度が高くなったことがわかる。

一戸建住宅との比較では、わずかながら、“満足、まあ満足”が多く、“やや不満、不満”が少なくことより、集

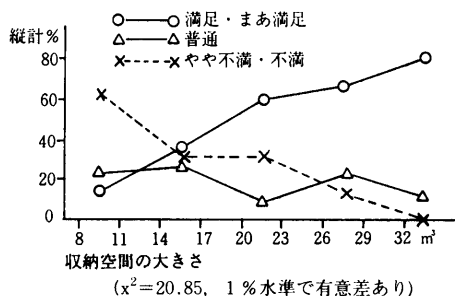
次に、住宅形式別満足度をみると、図12のようになった。完全自由設計集合住宅の方が、部分的自由設計集合住宅に比べて、“満足、まあ満足”が多い。部分的自由設計集合住宅では、“普通”が一番多く、

前住宅の収納空間との増減比較と現在の満足度についてみると図13のようになった。前住宅に比べ、収納空間が増えた人の中により満足を表明する人が多い。また、収納空間が増えても、不満を表明している人も多いが、これは、

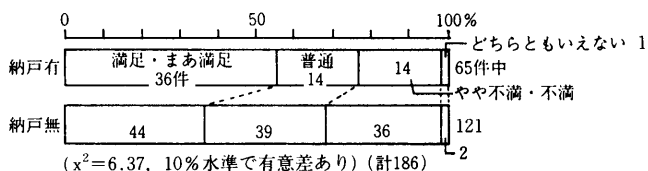
と理解してよいであろう。

次に、満足度と収納空間の大きさとの関係を見てみると、図14のようになった。この図より、収納空間が大きくなるほど満足度が高くなることがわかる。これは一戸建住宅の時の傾向と同じである。

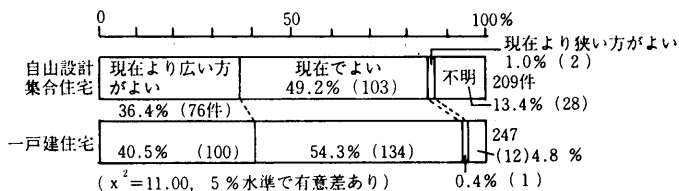
次に、満足度と納戸の有無との関係を見てみた。図15のように、納戸をもっている人の方が収納空間に満足している人の割合が多く、不満に思っている人が少ないことがわかる。先に述べた満足度と収納空間の大きさとの関係をあわせて、対象者が納戸のような大きな収納空間を好み、収納空間の絶対量が大きい方がよいと感じていることが推測される。これも、一戸建住宅の時の傾向と同じである。



＜図14＞満足度と収納空間の大きさ



＜図15＞満足度と納戸の有無



＜図16＞収納空間の大きさの評価

りとしたことはいえないが、一戸建住宅の場合より広さ指向が弱く、全体面積に制約のある集合住宅の特徴が反映しているように思われる。

大きさの評価と収納空間の大きさの関係を見てみると、図17のようになった。収納空間の狭い人ほど“現在より広い方がよい”とし、収納空間が大きい人ほど“現在でよい”とする傾向があった。また、収納空間のかなり大きい人にも“現在より広い方がよい”とする人がおり、収納空間の量への要求が高いことがわかる。

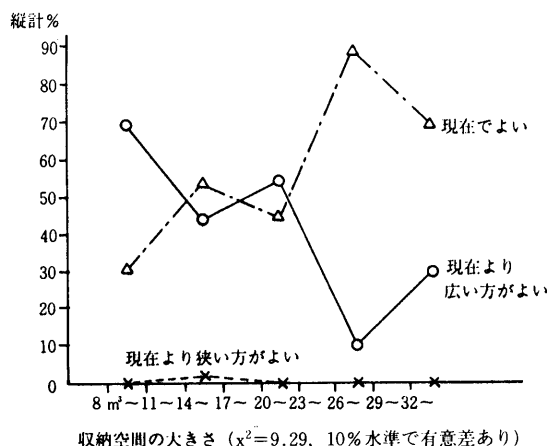
次に、大きさの評価と満足度との関係を見てみたが、図18のような結果を得た。収納空間につ

収納空間についての不満を自由記入により回答してもらったが、次のような結果を得た。表10の通り、「狭い」が31件（54%）と圧倒的に多く、次いで「屋外収納場所がない」が15件となった。「狭い」が1番多いのは、一戸建住宅の時と同じで、これから自由設計であってもなお収納空間が不足していることが読みとれる。二番目の「屋外収納場所がない」は、集合住宅特有の問題である。

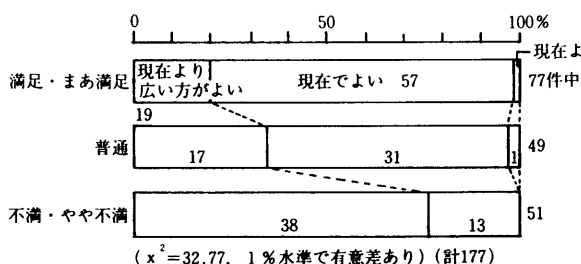
2) 大きさの評価と不足分

次に、対象者の収納空間の大きさへの評価について、もう少し詳しく見てゆくことにする。

収納空間の大きさへの評価，“現在より広い方がよい”・“現在でよい”・“現在より狭い方がよい”の3項目から選択方式で記入してもらった。（図16参照）“現在でよい”と答えた人が、全体の約半分を占め、“現在より広い方がよい”が36.4%となった。不明が多いため、はっき



<図17> 収納空間の大きさと満足度



<図18> 大きさの評価と満足度

<表10> 不満の内容

狭い	31件
屋外収納場所がない	15件
使いにくい	7件
納戸のように大きいものを入れるところが欲しい	7件
各室に1ヶ所欲しい	6件
物が多すぎる	6件
その他	3件

いて不満に思っている人には“現在より広い方がよい”とする人が多く、“現在でよい”という人が少ない。これより、収納空間に対する不満の多くが収納空間の大きさに起因しており、量的に満たされれば、ほとんどの人が満足することがわかる。このように、収納空間に対する対象者の評価は、即、大きさに対する評価であると言ってよいであろう。これは、一戸建住宅の場合とはほぼ同じ傾向である。

3) 収納空間に対する考え方

次に、対象者が、収納空間についてどのような考えをもっているかをみていく。

まず、住宅を設計したときに、収納空間について留意した点について自由に記入してもらった結果、表11のようになった。全体的に見て、形態的な使い勝手や、納まりのよさなどを中心にいろいろ工夫していることがわかる。

次に、収納空間に対する対象者の考え方を調べるため、まず、つくりつけ型か家具型か、2つの選択肢の中から、近いと思われる考え方を選んでもらった。結果は、つくりつけ型が、全体の76.1%を占めて多く、押入や納戸などをあらかじめ作っておけば、家具などで塞がれることなく、すっきりしてよいという考えによるものと思われる。

次に、居住空間重視型か収納空間重視型か尋ねたところ、居住空間重視型が、

全体の23.9%、収納空間重視型は57.9%を占めていた。一戸建住宅では、収納空間重視型が72.5%と多かったのに比べると、集合住宅では、若干、居住空間重視型が多い。これは、集合住宅では限られた広さなので、あまり収納空間を大きくとりすぎると、居住空間が狭くなってしまうとい

＜表11＞ 設計時の留意点

収納空間の形をつかいやすく考えた。	3 4 件
分散して収納空間を配置した。	2 3
作りつけで家具等も収められるように考えた。	1 4
全体的に広くとった。	1 4
不用なものを持たないようにした。	1 1
地下・屋根裏を利用した。	7
居室とのバランスを考えた。	6
集中型・納戸をとった。	6
その他	4
合 計	1 1 9

を希望している。しかしながら、狭い空間の中で、居室部分とのバランスも考慮せねばならず、無制限に収納空間をとることができないというのが、対象者の共通の意識のようである。

う考えによるものであろう。

以上のように、ここでは対象家庭の収納空間の評価についてみてきた。入居年が新しいということもあって、一戸建住宅の場合と比べると、比較的良好な収納空間であると推定された。また、収納空間が大きくなるほど満足する傾向にあり、不満の内容は、一番に“狭い”，二番に“屋外収納場がない”となっていた。自由設計集合住宅居住者にとって、収納空間は比較的重視して設計される場所であり、家具などで代用するより、つくりつけの収納空間

4. 結論と考察

以上より、自由設計集合住宅の収納空間および所有物の実状とその使われ方を中心に、その結果をまとめ考察を加えることにする。

調査の結果から、自由設計集合住宅の収納空間の実状をまとめると次のようになる。

①対象住宅は、昭和52～61年の間に建てられた新しい集合住宅で、住宅の平均面積は、85.6㎡で、収納空間の平均体積は18.0㎡であった。収納空間に対する評価は、一般に高く、入居年が新しく、ライフサイクルの初期の家庭ということもあって、比較的良好な収納状況であった。

また、一戸建住宅に較べて、わずかながら収納場所と収納物の対応が混乱している傾向があった。

②一戸建住宅に較べて、収納物の使用頻度が高い物が多かった。これから、所有物が精選されている傾向があることがわかった。また、納戸にも“よく使う”ものが多く収納されていた。

③収納家具としては、機能的で新しいタイプであるサイドボード・チェスト類が多く見られた。

④約1/3強の家庭にはみ出し収納があった。これらは主としてたんすの上やベッドの下を占領しているが、使用頻度は少ないものが殆んどであった

⑤屋外収納場所として、トランクルームをあげた家庭もあったが、メーター室やベランダの上に物を置いている家庭が多かった。

⑥収納空間に対する各家庭の評価では、約40%が満足で、収納空間が大きいほど満足する傾向があった。また、収納空間には、つくりつけ指向があり、居室等、他の必要空間とのバランスで収納空間の大きさが制限されていることがわかった。

以上が、今回明らかになった自由設計集合住宅の収納空間の主な実状である。次に、これらの現実から自由設計集合住宅の収納空間について考察を加えることにする。

今回の自由設計集合住宅の収納実態調査を通じ、その結果についての特徴をあげてみると、先ず第一に、広い一戸建住宅居住者に比べ、収納に対する満足度が、相対的に高いことがあげられる。これは自由設計の賜とも考えられるが、一戸建がフレキシビリティのある自由設計であったことを考えると、そのことのみによって確保できた成果であるとは考えられない。今回の調査結果から考察すると、当対象には、彼等自身に備っている収納に対する積極的な態度、ひいては意識の高さがあるように思われる。これを示す根拠として、対象が、入居後間もない新築住宅居住者という背景はあるものの、所有物の精選がなされていることや、使用頻度の高いものしか所有していない実情、あるいは、本文（6頁参照）図4中の、『同じ住宅面積なら、一戸建住宅よりも集合住宅の方が収納空間が大きい』こと等があげられる。ただ、「はみ出し収納」等の実態から推測すると、この意識の高さや、積極的な態度も、少しばかりの“贈答品”があれば崩れてしまう程度の脆いものであった。“脆さ”の原因は何といっても住宅の狭さであり、集合住宅では自由設計と言えども越えることのできない背景である。

このような状況の中で、当対象が、今後とも、従前どおり収納空間に対し満足度の高い状態を保ってゆくためには、住宅の狭さや、収納空間のフレキシビリティの無さを補う収納環境を整備しておくことが必要であろう。一戸建住宅のところでも、不急品、不用品を吸収する地域のリサイクルシステム等の確立の必要性を述べたが、上記等のシステムは、集合住宅において、収納環境の一部として欠かすことのできない受け皿となってゆくであろう。

第二の特徴は、屋外収納空間の不備さに関連するものである。これは、第一の特徴の考察部分に関連する内容でもある。

集合住宅は、その形式的特性から、屋外に収納空間を設置しにくい事情にあることは理解できるが、集合住宅居住者に、屋外生活が無い訳ではなく、屋外収納空間が不要だということでもない。ただ、今回の調査では、“自由に設計できる収納空間”に焦点を合わせたため、屋外の共同所有地に据えられている共同利用等の収納空間の状況については、自由記入で、その内容を窺い知る程度に止めている。また、同じく、集合住宅の駐車場の問題等が関係してくると、調査対象は、集合住宅住戸の居住者（所有者）のみでは不十分であり、自動車の所有者・非所有者、団地管理組合、自治会等での調査を含める必要がある一方、調査内容も、空間的対応だけでなく、安全性、騒音問題等多くの視点から構成される必要がでてくるため、直接とりあげることにより、問題を複雑にすることを避けている。

このように組まれた調査ではあるが、屋外収納の不備さを随所に読み取る結果になった。調査結果を分析して先ず意表をつかれたのは、本来なら戸外に置くべき自転車が、屋根裏部屋に収められてあったり、屋外で使用する物品が、ベランダの上やメーターボックスに収納されていたりした事実である。また、自由記入欄には、自動車、自転車、乳母車、子供の戸外遊具などの置き場に関する不満が大変多く示されていた。

また、このように不自然さや不満があっても、今回の対象の一部では、戸外収納について、“自動車を持たないこと”を申し合わせたりして、お互いに迷惑をかけない一線を守ること、切り抜けてゆこうとしている様子であった。しかし、いずれ、代替り・転売などが進むと、それだけでは対応し切れない時期がやって来るとも予想される。

集合住宅の戸外生活、中でも戸外収納空間の問題は、わが国では、既に古くから体験してきている問題で、公団住宅団地・公営住宅団地等でその典型問題例は、ほぼ学習済みである。

今回の調査から、自由設計持家集合住宅では、個別所有でなく共同所有領域にかかる戸外生活

空間のあり方が、まだ十分に配慮できる状態になっておらず、従来の借家集合住宅の経営・管理過程で蓄積された成果が殆んど参考にされていない状態であった。

屋外収納空間への取り組みは、当対象の収納空間のうちでも、特に今後に残された課題である、といえるであろう。

以上、第一、第二の特徴とも、“集合住宅の収納”ならではの特徴と考えられるが、この問題は、他の集合住宅の生活領域の問題と同様、システムとして共同解決という方向が非常に重要になってくるように思われる。そうなれば、今後、住宅所有者個人に代り、持家集合住宅の団地の管理組合等の力量がますます問われることになってゆくであろう。

最後に、この調査に御協力いただいた、洛西ニュータウン（洛西コーポ、花みずき）、宇治あじろぎ横丁、桜井コーポ、箕面瀬川集合住宅、コーポデネブ、茨木コーポクレセント、新大阪ファインナンスの皆様に、心よりお礼申しあげる次第です。ご協力ありがとうございました。

参考文献

- 1) 関川千尋・北川敏子・市川裕美：都市中流一戸建住宅における収納空間に関する調査研究，京都教育大学紀要，B. NO. 69，P. 43-57，（1986）
- 2) 財団法人 日本住宅総合センター：コーポラティブ方式の発展に関する調査研究Ⅱ，（1986）
- 3) 総務庁統計局：家計調査年報・昭和62年，日本統計協会，P. 84（1988）